派遣遊女

case by Yuki

Feather Novels

現在の俺の状況は芳しくない。
両手両足拘束されて猿轡をかまされている。全裸で。
そして悪魔のようなメイドさまに責め苛まれている。
漆黒のストッキングに包まれた柔らかい足の指が、
およそ人類では可能と思えない動きで男の魂の箇所を
凌辱中である。擦り、抓り、蹴り、焦らす。
俺が情けなく身体をビクつかせる度にメイドさまは、
侮蔑のこもった視線を捨てるように浴びせる。
生殺しである。猿轡のせいで鼻息だけが熱くこもる。
フガフガと懇願する俺をメイドさまは冷笑した。
「だらしないですよ。ご主人様のクセに」
どうして、俺はこんなコトになっているのか。

からんころん。
メールにあった通りの時間に喫茶店についた。
いつも待ち合わせに使う店で座る席も決まっている。
奥まったその席で見知った顔がふたつ、顔を突き合わせて何やら相談していた。
ロクさんと女性、珍しいアケミさんだ。
最後に会ったのはズイブン前だ。常時予約が半年先まで埋まっている売れっ子にこんな処で会えるとは。
趣味の悪い背広を着た丸い男はロクさん、「派遣遊女」のポン引きである。オレンジの背広なぞ初見だ。
明らかに会話で乗り気でないロクさんに、構わず大声で喋り続けているのがアケミさん。「派遣遊女」のナンバーワン。真の高級娼婦だ。
見た目こそ若いが騙されてはいけない。十年前に筆おろしでお世話になったとき、既にあの容姿だった。
日付さえ覚えている衝撃的なあの日から、まったく変わっていない。むしろ若くなった気さえする。
男どもの精気を吸い取って生命力に変えているという噂も納得できる妖怪ぶりである。

歩きながら声をかける。
気づいたお二人さんがこちらを見てニヤリと笑った。
アケミさんのニヤリは小悪魔ちっくで背中にピクリと電気が走る。ロクさんのはビリケン様だ。愛嬌はあるが、ちょっと気持ち悪い。
べったりというワケでもないが、この二人とは長く付き合ってもらっている。
もう十年か。あのときは高校生だった。
店の手伝いと新聞配達の給金が出たらロクさんにメールを打つ。
指示の場所で美人を待つ。目印は携帯の着メロだ。
返信メールに添付されたそれは、ロクさんのオリジナルで指示の時間になったら鳴らす。
同じタイミングで席を立つ美人がいるから、彼女と肩を並べて指定の休憩所に向かう。
毎回、ドキドキワクワクだったなぁ。
「派遣遊女」にハズレはなかった。一か月のバイトと引き換えにして余りある数時間を過ごせた。

「お久しぶりです。今日も美人ですね」
「あら、お上手。映画でも見た？」
「いいえ。皆さんの仕込みのおかげです」
例外なく年上女ばかりの「派遣遊女」は性に関してスパルタだった。
女を買っている、という感覚はあまりなかった。
今思えばあれは性技と対人コミュニケーション能力の実地訓練というべきものだったのかもしれない。
美女相手の。
おかげで人見知りは治ったかもしれない。感謝。
「お姉さんたちもガンバッタ甲斐があったかしら」
豊満な胸を揺らしてふふふ、と目を細めた。
色、かたち、さわり心地と三拍子そろった魔性のおっぱいである。
ガンバッてくれた思い出を検索するだけで、身体が熱くなるようだ。
「それじゃぁ、今日はアケミさんにお相手願えるんですか？」